

\* 登場人物

響子（幸子） 17歳（記憶喪失の娘）  
山本哲夫 22歳（護岸工事現場で働く）  
谷崎尚之

放送日時 平成十七年三月二十一日（月）  
十九時から二十時  
之  
山本誠一 89歳（哲夫の祖父） 中島利克  
山本誠一 22歳（若き日の誠一） 谷崎尚

第一回北のシナリオ大賞受賞作品  
『思い出したかぐや姫』改題  
竹村亮蔵 55歳（食堂の亭主） 木村功  
竹村美津子 54歳（亮蔵の妻） 斉藤和子  
響子の父 45歳（貿易商） 城島イケル  
響子の母 39歳 竹江維子

明日をください  
食堂の客A 黒岩孝安  
食堂の客B 竹田晋  
中年の女A 中村寛子  
中年の女B 永井くみ子  
現場監督 松本直人  
医者 立川佳吾

榎木啓子

補筆 合田一道  
守分寿男

看護婦A 渡辺香奈子  
看護婦B 松岡春奈  
火事場の人々ほか

制作 北海道放送

SE 強風の音(波、カモメの鳴き声も)

橋の上を走る車両の音  
ふいに声

中年の女A みて、みて、みて！ あの人変じゃない。

中年の女B どこ？

中年の女A ほら、あそこ。橋の下の川のそば。

中年の女B あっ、ホント。若い女ね。たった一人で、あんな処でなにしてるのかしら……

中年の女A だから、……。

中年の女B ……いやだ。身投げ？！

中年の女A どうしよう！

中年の女B (走る車に) 誰か、…お願いします！ すみませーん！！

SE 急停止の音

現場監督 どうかしました？

SE 車の中からカーラジオの音

中年の女B 変なんです。身投げ、自殺者です。きつとそうです。あそこ！

SE 監督と哲夫、中から降りて、橋げたに駆け寄る

車の窓から、カーラジオが函館地方の天気、強風注意を呼び掛けている

監督 ほんと、変だな、哲、行ってやれ。

哲夫 ハイ！ (走り出す)

監督 (走り出す背中に) ちょっと待て！、いいか、後ろからゆっくり静かに近寄って、抱きとめるんだぞ、うかつに大きな声を出すと飛び込むから。いいな。

哲夫 ハイ。(走り去る)

中年の女A よかった！

SE 車のラジオ——今日は三月二十

一日、71年前のこの日は、日本災害史に残る函館大火の日です。あの日も風の強い日でした。午後6時58分、住吉町(現在の真言宗高野寺墓地付近)に始まった火災は、最高風速、秒速39メートルという台風並みの低気圧も手伝い、死者が2、000人を越えるという大惨事となりました。火の元にはくれぐれも…(風に乗ってとぎれとぎれに聞こえている)

監督 あいつ、護岸工事のプロだから、川には慣れてる。もう大丈夫です。

中年の女B あっ、歩き出した。

中年の女A 危ない！ ころんだわ！

監督 (大声で) 哲！、走れ！

間

中年の女A ああ、よかった！

監督 おーい！ 大丈夫かあ！

哲夫、女を後から抱き起こして

哲夫 (息をきらせながら) あのさあ、あんな、ねえ、人騒がせなこと、(顔を見て絶句して、声が裏返る) あっ、…あんな、ねえ、こんなに綺麗な顔して、死んだらだめだよ。人間、まず生きなくちゃそりゃあ、人間、辛いことだって…(響子のあまりの美しさにしどろもどろに) あ、あるかもしれないけど、いや、あるよな。俺にも、(フーと息を吸って)俺にも？ あるような…いや、辛いですよね、だけど、死、死んじやったら、おしまいですから…

哲夫の声が次第に遠くなり、すべての音が消えて

響子 ……ココハドコ？ ドウシテワタシハココニイルノ…。ワタシハダレ？

M 静かに入って

タイトル『明日をください』

SE 救急車のサイレン

病院内のアナウンス、例えば  
「△先生、外科外来まで連絡  
ください」

看護婦A (診察室から) 山本さん、中へお  
入りください。

哲夫 (大きな声で) あ、はい。(響子に  
小声で) 行くよ。

響子 怖い、なんにも見えない。

哲夫 大丈夫、俺がついてる。

響子 (怯えて哲夫に小さな声で) お願い  
です。助けて、助けて。

哲夫 (当惑して) ああ? あ、ああ。

看護婦A (前より大きな声で) 山本哲夫さ  
ん、お入りください。

哲夫 はい。さあ、立とう。

SE 診察室へ入っていく二人

医師 とりたてて外傷はみられませぬ。

それより、心療内科へ行ったほうがいい  
でしょう。

哲夫 心療内科?

医師 記憶喪失の疑いがあります。眼科の  
方も異常なようですから、目が見えな  
いのも一時的なものかもしれませんよ。

哲夫 (エエツという感じで) 記憶喪失。

医師 あなたは御家族じゃないんですよね。  
どうします? 警察に連絡しますか。

哲夫 (慌てたように) いや、先生、俺、  
この娘知ってますから。さ、行こう。

SE 二人の立ち去る音。

看護婦A 綺麗な人…。  
看護婦B …まさに、絶世の美女、ネ。

SE 朝市付近の食堂、その辺りの雑

踏

食堂内の音(店のラジオの音)

客 おばさん、勘定、ここ置くよ。

美津子 はいよ。たまには真っ直ぐ帰るんだ  
よ。

客 ハハ。(笑)

SE 戸が開いて出て行く

美津子 (待ちかねたように) で、…あの娘  
の名前は?

哲夫 分からない。なんてったって、記憶  
喪失なんだから。

美津子 だけど、目も見えないのに、どこか  
ら来たんだろうね。

哲夫 うん、ホント訳わかんないんだよな。  
美津子 着てる服、いいもんだよ。仕立てた  
ものだも。相当いい家のお嬢さんだね、

きつと。

哲夫 じゃあ、おばさん、頼むよ。

美津子 (強く) えつ、そんなこと言ったつ  
て。

哲夫 今晚一晩だけでいいからさ、ねつ頼  
むよ、頼む。お願い! まっさか、おば  
さん、こんな風の日に追い出すなんて、  
鬼みたいなこと言わないよね。じゃあ、  
俺、仕事に戻らないとなんないから。

美津子 しょうがないねえ。交番にはちゃん  
と届けておくんだよ。ほんと、哲っちゃん  
んは綺麗な娘に弱いんだから。

哲夫 ハハ、(響子に向かって) あのさ、  
もう安心していいから。

亮 蔵 あ、哲、じいちゃんの具合はどうだ  
い? 毎日病院によつてるんだろ。

哲夫 うん、今のところは落ち着いてるよ。  
そんなじゃあ。

SE 食堂の戸を開けて哲夫が出て行  
く

亮 蔵 今日はずもう、店、閉めるぞ。

美津子 そうだね。じゃあ、奥へ行こうか。  
少し横になったほうがいいよ。

響子 ……。

SE 三人の足音、引き戸を開閉する  
美津子と響子だけ次の間へ(戸  
を開ける)

美津子 さあ、入って、少し段があるからね。気をつけて。あ、この畳、少しすべるから。…さあ、ここに座って…。

響子 ……。

美津子 楽にしていんだよ…：あんだ、どこから来たの。

響子 …：遠くから。

美津子 遠くって？

響子 ……。

美津子 なんか覚えてることないの？

響子 ……。

美津子 遠くって、…どこ？

遠くから心象のように連絡船のドラの音、そして、汽笛

響子 (必死に)…：船。

美津子 船？ 船で函館にきたのネ。他に

は？

響子 …：お母さん。

美津子 お母さん？ お母さんとききたの？

汽笛が火事のような不気味な音に飲み込まれて

響子 ちがう。分からない、分からない、

(悲鳴のように) お母さん、あの人は、

あの人は。

美津子 ごめん、ごめんよ。もういいよ。体

にさわるからね。じゃあ、休んでるんだよ。何も心配いらなからね。

SE 戸を閉める

亮 蔵 …：どうだ？

美津子 かわいそうに、ほんとに、何も覚えてないみたいなんだよ…。

亮 蔵 幸子が生きてたら、ちょうど同じく

らいの年頃かな。

美津子 そうだねえ、肺炎で持ってたとき、幸子、たったの三歳だったもんね…

あんなに可愛かったのに。

亮 蔵 (くぐもった声で) ああ。

美津子 あの何日か後に、こんどは哲っちゃん

の両親の交通事故だろう…：ほんと、いやな年だった…。あんどきはかわいそう

で哲っちゃんのこと見てられなかったわ

…：あんたも泣いてたさね。

亮 蔵 (言い訳するように、少し照れ怒りで) 哲、まだ、五歳だったからな。

美津子 だけど、哲っちゃんがいてくれたお

かげで、ずいぶん慰められたよね…：あの子、優しいんだよ。わたしが泣いていた

ら、

『おばちゃん、べー』なんておかしな顔して

みせてさ…。

(黙って、小さな手で私の頭を撫でてく

れてさ)

亮 蔵 哲は、いつもお前のあとを追いか

つたなあ。

美津子 哲っちゃんのおばあちゃん、弱かつ

たから…。

亮 蔵 …：早いもんだ。

美津子 ねえ、あんだ、あの娘さんがうちに

来たのも、なんか、神様か仏さまの思し

召しかもしれないね。

亮 蔵 ハハ、風が強くなってきたな。海が

荒れてる。…あの娘、しばらくうちであ

ずかるか。

美津子 (笑って) 私も、そう言おうと思っ

てた。

SE 食堂のラジオ(四月になったと

わかるような放送エープリルフ

ールについても、入学式で

も)

食堂の入り口の戸が開く音

美津子 いらっしやい。

客 A 親子丼。

客 B 俺はラーメンライス。ねえ、おばさ

んとここで、親戚の娘を引き取ったんだっ

て。

客 A おばさんとは似ても似つかぬ美人だ

って聞いたよ。いっおがましてくれるの。

美津子 なに言ってるんだい。私だって若い

頃はなかなかのもんだったんだからね。

ああ、ああ、歳は取りたくないねえ。

客 A (小声で) 歳のせいなあ。

美津子 うるさいねえ、そう簡単には見せられないよ。

SE しばらくは食堂の喧騒

亮蔵と美津子の足音

奥の戸を開ける音

美津子 待ったかい。あれ、いないの？

よつと、あんた、いないよ！

亮蔵 俺、外、見てくるわ。

美津子 私も行くよ。

SE 外に走り出る二人、表に哲夫

哲夫 どうしたの、おじさん。

亮蔵 いないんだ。

美津子 (ひどく心配そうに慌てて) 裏から

出たみたいなんだよ。

哲夫 え！マジかよ、ちゃんと見てくれなかったのか。

SE 街の喧騒(車やオートバイの走る音など)

哲夫 (走りながら) だから、あれほど目を離すなって言っと思ったのに！やばいよ。目が見えないんだぞ。なにかあったらどうするんだよ。

哲夫 あつ、あそこ！いた！  
少しの間

哲夫 (心配のあまり怒った声) こんなところ

に座り込んで、危ないだろう。(無事だったことにほっとして) ほら、手

しな。

響子 ……。

美津子 さ、帰ろうね。すっかり冷えきって

るじゃないか。

哲夫 一人で外に出ちゃだめだよ…変な奴

だっているんだからさ。

すべての音が消えて

響子(M) オカアサン、アノヒトハ、ド

コニイルノ…アノヒト、アノヒト、

アノヒトガイナイ…。

哲夫 (やさしく) さあ、帰ろうね。

SE かすかに音が戻る

美津子 どうやら落ち着いたようだね。

亮蔵 明日からは、一緒に店に連れて出た

ほうがいいな。

美津子 そうだね、一人にはしておけないよ

ね。(声をひそめて) ねえ、あんた見

た？あの娘、さっき泣いてたの。

亮蔵 ああ。

美津子 涙をいっばいたためて、…涙がポロ

ポロこぼれた。

亮蔵 よっぽど辛い思いをしたんだろうな

あ

SE 住居の台所。お玉や鍋を扱うカ

チャカチャイウ音

居間のほうからテレビの音

美津子 ねえ、ちよつと、ちよつと、あんた、

見てごらん。哲っちゃんたら、さつきか

ら、ずつとあの娘に見とれてるよ。

亮蔵 ありやあ、そうとうまいってるな。

美津子 (ふざけたように) 私もあんなふう

に見つめられたいもんだね。あんただっ

たら、ほんと、朴念仁なんだから。

亮蔵 (小さな声で) てめえの顔(面)と

相談してから言ってくれ。

美津子 なんか言った？(大きな声で) さ

あ、御飯にするよ。

哲夫 待ってました。腹へったなあ。

SE テーブルに皿、茶碗をのせる音

美津子 ねえ、名前なんだけど、いつまでも

名無し(このまま) っわけにもいかな

いだろう。…幸子、さっちゃんっていう

のはどうかしらね…あんた、それでいい

かい。

響子 はい。

美津子 (嬉しそうに) そうかい。

哲夫 (嬉しそうに) さっちゃんかあ、ハ

ハ、さっちゃん。

亮 蔵 おい、哲 顔が崩れてるぞ。

三人 (笑い声)

美津子 哲っちゃん、おじいちゃんはどう？  
私らも、明日あたり行ってみたいと思っ  
てるんだけど。

哲 夫 (沈んだ声で) うん、もう歳だから、  
良くなるはずはないんだけど、……俺、  
じいちゃんがいなくなるなんて考えられ  
ないんだよな……。

美津子 そうだよな、おばあちゃんが死んで  
から二人きりだったからね。……今でも思  
い出すよ、あのお通夜の晩のことは。……  
おじいちゃんの横に小学生の哲っちゃん  
がちよこんと座ってるのがいじらしくて  
ねえ。(涙ぐみ、鼻をすする)

哲 夫 俺さ、あの晩、窓から月を見て、ば  
あちゃんが死んだのに、どうしてこんな  
に綺麗なんだって、……おかしなこと考え  
てたなあ。あれ、俺ってけっこう詩人？

響 子 明日……。

美津子 え？

哲 夫 立つちや危ない。

響 子 私に、……明日をください。

美津子 なに言ってるの。明日はいっしょに  
お店にいようね。

哲 夫 さっちゃん、どこ行くの？ そこは  
窓。……分かってるのかなあ。

美津子 何か見える？

哲 夫 月が出てる。

美津子 どんな月？

哲 夫 シツ。

響 子 (呟くように、次いで、しっかりと  
した声で美しく)  
あかしやの金と赤とがちるぞえな。  
かはたれの秋の光にちるぞえな。

SE 蝉の声

食堂のラジオの音  
入り口の戸が開く

美津子 いらっしやい。

客 B いやー、暑い、暑い。

客 A 冷やしラーメン。

客 B 俺も。

美津子 はいよ。

客 A さっちゃん、どお。

美津子 記憶の方は相変わらずだけどね、目  
の方は、ぼんやりとは見えるみたいだよ。

客 A そうかい、よかったじゃない。ここ  
に来て、三か月くらいはたつもな。

美津子 そうだよな、もう、七月だもね。

客 B 今日は哲、まだ来てないのかい。

美津子 もうそろそろそろじゃないかい。さっち  
やんが来てからさ、毎晩ころがるように  
して飛び込んでくるんだから。

客 B そう言えば、合コンの話、このごろ  
聞かないもな。

客 A この間、あいつ、本屋で熱心に立ち  
読みしてるんだよ。エロ本でも読んでる  
かと思ったらさ、ファッション雑誌だつ

たさ。

亮 蔵 (びっくりして) 男のか。

客 B おじさん、今は、男の化粧品だつて  
売ってるんだよ。

亮 蔵 はあ。

美津子 だから、とっかえひっかえしてくる  
んだ。だけど、なんか、おかしいんだよ  
ね。

SE 入り口の戸が開く音

哲 夫 (元氣良く) おばさん、カレー。

客 B 噂をすればだ、ハハ。(からかうよ  
うに) あれえ、哲、今日は決まってるね  
え、まるで、雑誌から出てきたみたいだ  
ぞ。

哲 夫 (とぼけて) いや、別に。

亮 蔵 どうせなら、その頭もどうにかして  
こい。寝癖だらけじゃないか。

哲 夫 おじさん、これがいいんだよ。

客 B (笑って) 哲、さっちゃんが哲のこ  
と好きだって、さっき言ってたぞ。

哲 夫 (あまりに恋しているためうまく反  
せない) え、あ、はは、……マジ？」

客 A (笑いながら) せっかくめかしこん  
できたんだから、さっちゃんなんか言っ  
てやって……って (響子の異様な雰囲気  
に語尾が弱まる)。

響 子 わたし、あなたを知ってる。

哲 夫 いや、そりや、そうだろう。

響子 顔を触らせて。

哲夫 (ためらいがちに) ああ。

響子 やつぱり、あなたね。…あなた、わたしをおぶってあの運河沿いの道を走ってくれたわ。

哲夫 さっちゃん、なに言ってるんだ。しつかりしろよ。

響子 わたしが病気るとき、四十度近い熱で苦しんだとき、あなたはわたしを助けてくれたわ。

哲夫 さっちゃん、それは俺じゃない。人違いだよ。

響子 あの時、わたし、十一歳だった…十六歳のあなたは真つ暗な道をお医者さんを探して、わたしを上げましながら走ってくれたわ。

哲夫 さっちゃん、止める。俺だ、哲夫だ。

響子 もし、あなたがいなかったらわたしは死んでいたわ…あなた、あなたね…

哲夫…：そうか、さっちゃんの言うあの人はその人なのか。

響子 ああ、もう少しでなにもかも思い出せそうなのに。

哲夫 (悲しそうに) さっちゃん。(空元気で無理して) あのさあ、いつかさ、こう、霧がばあっと晴れたみたいに思い出すって。大丈夫、もう少しだ。

客 A (静かな声で) ここ置くよ。  
客 B 俺も。

美津子 (小さな声で) はい、毎度あり。

SE 戸を静かに開け閉めして出て行く足音

美津子 (哲夫の気分を変えるように) さあてつと、一段落だね、お茶でも入れようか。

亮蔵 そうだな。ああ、今日、病院へ行ってきたけど、じいちゃん、あんまりよくないようだな…。

哲夫 うん、気力で持ってるっていうか、俺、一日でも二日でも長く生きてほしいんだけど、見てると辛いんだよな。もう楽にしてやりたい思ったりする…。

美津子 そうだろうね…。

SE 「〇さん、検査終わった？」というような、病院とかる声や音  
哲夫の歩く足音

哲夫 お世話になってます。  
看護婦 おじいちゃん、今日は少し気分がよさそうよ。

SE ドアを開けて閉める音

哲夫 (くつたくありげに) じいちゃん…。

誠一 ン、哲夫か、…どうした。  
哲夫 別に。

誠一 (笑って) 幾つになっても変わらない

いな、(優しく) どうした、元気がないな。

哲夫 (思い切って) 俺、好きな人ができた(弱い笑い)…。

誠一 そうか。

哲夫 だけどき、その娘、俺のことなんて眼中にないんだよな…(切なそうに) 俺、どうしたらいいのかなあ…。

誠一 その人は、他に好きな男でもいるのか。

哲夫 …うん。

誠一 あきらめる。無理に押し通しても、お前も、その人も幸せにはなれない。

哲夫 (少し驚いたように) じいちゃん。

誠一 …俺は、好きな人を幸せにできなかった。それだけじゃない。芳江にも申し訳ないことをした。

哲夫 芳江って、ばあちゃんのこと？

誠一 ああ、俺の体に大きな火傷の跡があるだろう。

哲夫 うん。

誠一 若い頃大火事にあって、その時助けられたのが、芳江の父親だ。早くに亡くなったんだが、後を追うようにして母親も…息を引き取るときに、芳江を嫁にしてやってくれと頼まれた。

哲夫 そう。

誠一 …あの時は、そうしなければと思うたが、…だけど、それが良かったかどうか。あれは俺の気持ちに気付いていた

ろう。

哲夫 そうかな、俺の覚えてるばあちゃん、  
けっこう幸せに見えたけどな。

誠一 ……そうか。哲夫、もし、お前が好き  
だという人の心が一生お前のものじゃな  
くても、お前は幸せか？

哲夫 ……。

誠一 ……そういうことだ。

哲夫 じいちゃん…。

誠一 ……(静かに笑って) 今でも、その人  
は俺の心の中にいる。

哲夫 ……。

誠一 元気を出せ。きっと、お前を好きに  
なる人が出てくる。

哲夫 ありがとう、(吹っ切れたように)

俺、帰るよ…じいちゃん、そのじいちゃ  
んが好きだったって人、その人もじいち  
ゃんを？

誠一 ああ…。

SE 哲夫の去って行く足音

SE 食堂の外の喧騒

入り口の戸が開く

—FO

美津子 いらっしやい。

客C ラーメンライス。

客D 俺はカレー、大森で。

美津子 はいよ。

SE ガス台で油が跳ねて炎の上がる

音

美津子 ウワア、あんた、ガス台！ 火！

火！

響子 アー、火が。火が飛ぶ！

亮蔵 大丈夫だ。

SE あわてて消し止める

美津子 さっちゃん、さっちゃん、大丈夫だ

よ、もう消えたよ、ほら座って。震えて  
るじゃないか。

SE 食堂の入り口が開く

哲夫 こんちわ、…おばちゃん、カレー。

(驚いて) さっちゃん、どこ行くの！

SE (憑かれたように) 歩く響子、

ついて行く哲夫

通りの喧騒

哲夫 待てよ、まだよく見えないんだから

危ないよ。さっちゃん、どうしたの。

響子 ……(呟くように) 橋。

哲夫 橋？ 大森橋へ行きたいのか。

響子 呼んでる…あの人が呼んでいる、あ  
の人が呼んでいる。

哲夫 ……さっちゃん、…わかった、行こう。

SE 波、カモメの鳴き声

哲夫 もういいだろう、暗くなってきたよ。

帰ろう。

SE 打ち上げ花火の音

哲夫 (ボソッと) 花火大会か…さあ、戻

ろう。

響子 (ふいに) 思い出したわ。私の名は

響子。

哲夫 さっちゃん。

響子 私の名は響子。寒い夜だったわ。蒼  
い透き通った月が河に映っていた。医者

を捜して走るあの人に背負われて、わた  
し幸せだった…わたしの吐く息があんま  
り熱いので、あの人が、心配そうに何度も  
振り向いて…。

哲夫 ……。

響子 ……。

哲夫 あの日からずっと、私はあの人が好

きだった。

哲夫 ……。

響子 あかしやの金と赤とがちるぞえな、  
あの詩集、『雪と花火』、北原白秋のあ

の詩集はどうしたのかしら。あの日の想  
い出に、あの人が赤い印を付けてわたし  
にくれた…。

今までの音が消える



ドアを大きくボタンと開ける音

響子の父 なんだ、この本は！

本をテーブルに叩き付ける音

響子 お父さん。

響子の父 書生の分際で、よくも娘に近付いたな。

誠 一 私の響子さんへの気持ちは真剣です。響子さんも。

響子の父 黙れ！ 黙れ！ この会津者が。響子の母 あなた、お止めになって。今更、

薩摩も会津もないでしょう。誠一さんは素晴らしい青年じゃありませんか。

響子の父 うるさい、女、子供が口を挟むな。響子の母 いいえ。響子はずっと誠一さん

を思っていたんですよ。ご自分の娘をどうぞ信じてあげてください。

響子の父 なにい。響子 お父さん、止めて。

誠 一 お願いします。私に響子さんをください。

響子の父 うるさい！ この恩知らず、今すぐ出て行け！

上野駅、雑踏の音

響子の母 向こうは寒いでしょうね… あなたはすぐ熱を出すから…。

響子 ……お母さん。大丈夫よ、誠一さんと一緒ですもの。

誠 一 安心してください。どんなことがあっても、響子さんを守ります。

響子の母 (笑って) ええ、心配なんかしていませんよ。それに、響子はなかなか芯

がありますからね。お手伝いのお梅がお父さんの壺を壊したとき、あなた、まだ

七歳だというのに、自分がやったと言つてかばつてたわね…。

響子 (少し笑って) そんなことあったかしら。

響子の母 お梅だけじゃないわ。いつの間にか私の前に立つようになって…。

響子 私がなくなつて、お母さん…。響子の母 ふたりはほんとうにお似合いよ。

(笑って) 今日は本当に嬉しいの。あなたの夢がかなつたんですもの…。

響子 (涙ぐみながら) お母さん…。

青森行のままなく出発というアナウンス、ベルの音

誠 一 必ず響子さんを幸せにします。

響子の母 ……ありがとう。こちらのことは気にしないで。これを持って行きなさい。

何かの役に立つでしょう。

響子 この指輪…おばあさまからくださいたい。たお母さんの大切なお守りでしよう。

ますよ。

汽車の出発の音  
走り始める汽車

響子 おかあさん…。

響子の母 (呟くように) 響子。

CO

SE 哲夫の携帯電話の音が鳴り響く  
遠くに花火音

哲夫 はい、……今行きます！ 俺が着くまでじいちゃんを死なせないでください。

お願いします。

響子 私も。

SE 時折聞こえる花火音  
病院の廊下を走る二人の足音

病室のドアが開き出てくる看護婦

哲夫 あ、どうですか。

看護婦 今、落ち着いて、眠ったところ。モニターで見てるけど、何かあつたらすぐ呼んでくださいね。

SE ドアを閉める音

大音響と共に花火の連発音

響子 ああ、火が！ 火が飛んでくる！

花火の音

響子 あの日、私たちが函館についた夜、  
函館の街が燃えた。

心象音 火事で物が燃える音、大勢  
の人の逃げ惑う声や足音

誠 響子 (恐ろしげに) 誠一さん。  
一 さあ、僕の上着を着て。走れるか。

二人の走る音

建物が崩壊する音

ガラスが割れて落ちる音

あちらこちらで「わあ」とか「きゃあ」という人々の悲鳴

誠 響子 (泣き声で) 怖い。

響子 大丈夫だ、手を放すな。

響子 ええ。

恐怖心を煽るような効果音

突風の音

人 一 ウワア、あつちはだめだ！ 火が飛  
んでるぞ。

人 二 向こうもだ！ 火の海だ！

あざけるような火のうねり音  
人々が右往左往する音

誠 一 大丈夫だ、手を放すな。  
響子 ええ。

恐怖心を煽るような効果音

突風の音

人 一 ウワア、あつちはだめだ！ 火が飛  
んでるぞ。

人 二 向こうもだ！ 火の海だ！

あざけるような火のうねり音

人々が右往左往する音

響子 (むせてせき込む) (泣きながら)  
どこへ逃げるか。

誠 一 あそこだ、あの路地を抜けよう、目  
をつぶって。

建物の崩れる音

響子 きゃあ。

誠 一 大丈夫か、怪我をしなかったか。

響子 ええ、行きましよう。

駆けて行くふたり

ふたりを飲み込もうとする炎の音

逃げる人々のざわめき

ときおり、家の焼け落ちる音

響子 (はあはあとした息遣い)

誠 一 (息遣い荒く) もう少しだ、がんば  
れ、(息遣いだけ)：響子、橋だ！ 橋  
があるぞ。

響子 はい。

誠 一 あれを渡れば大丈夫。

響子 (泣きそうに、それでも健気に) え  
え。あつ、手提げが。

誠 一 手提げ？ 手提げがどうした？

響子 (泣きそうに) 手提げがない！ 手  
提げの中に指輪が。

誠 一 そうか。

響子 さっきの路地だわ。

誠 一 わかった！ 俺が捜してくる。先に  
渡るんだ。

響子 わたしもいっしょに。

誠 一 駄目だ！ 行くんだ。(優しく) す  
ぐに追いつくよ。すぐだ。

響子 いや、離れたくない。

誠 一 大丈夫、すぐ戻る。さあ、元気を出  
せ。笑って！

響子 (泣きそうに) あなた。

誠 一 響子、走れ。

響子 (なきながら) はい。

走り出す響子の靴音

それを見て走り戻る誠一の靴音

ひどい突風の音

橋へ向かって走る人々の声「橋だ！  
橋へ逃げれ」や、走る足音、ざわ  
めき

響子 (走る息遣い、つぶやき) 誠一さん、  
早く戻って、橋よ、橋についたわ。

ひどい突風の音  
バリバリという音

橋の上の人A 火が、火が飛んでくるぞ。  
橋の上の人B 早く向こうへ渡れ！

逃げ惑う人々の悲鳴  
襲ってくる炎の音(橋の上の人を舐  
め尽くすような)

「橋が落ちる！」 「落ちるぞ！」  
橋が崩れ落ちる音

響子 誠一さん！ アアー(落ちていく。  
最初は絶叫、それが絶望の響きで)  
誠一 ああ、響子！ 響子！

最後の響子の声に覆いかぶさるよう  
に建物の崩れ落ちる音  
ゴーという何も彼も焼き尽くす音

響子 あの日、橋が焼け落ち、川に流され

てわたしは死んだ。

全ての音が消えて、その沈黙の中か  
ら、緊迫した病室の音が蘇ってく  
る。

哲夫 じいちゃん、じいちゃん、哲夫だよ。  
分かる？  
誠一 ……ああ。

誠一 目を開けてゆっくり響子を見つ  
める

誠一 ……響子。  
響子 誠一さん…。  
誠一 ……来てくれたのか。  
響子 どうしても、どうしても、あなたに  
もういちど、会いたかった。

誠一 ……ありがとう。  
響子 あなたがわたしを呼ぶ声が聞こえた  
わ。

誠一 ああ。  
間

響子 あかしやの金と赤とがちるぞえな。  
かほたれの秋の光にちるぞえな…。  
誠一 やはらかな君が吐息のちるぞえな。  
あかしやの金と赤とがちるぞえな。  
響子 覚えていてくれたのね。

誠一 忘れるものか。

ふたりの声が交ざりあつてゆく  
やはらかな君が吐息のちるぞえな。  
響子 あかしやの金と赤とがちるぞえな。

誠一 響子。  
響子 あなた…。  
誠一 ……あかしやの金と赤とが…。  
響子 あしたから、もう離れない…。

ふたりの声が、二重、三重に重なり  
あい、溶けあい、そして、沈黙の  
なかに消えてゆく。

哲夫 (驚いて) さっちゃん！ 体が…さ  
っちゃんの体が消える。あ、じいちゃん、  
じいちゃん。

SE 心電図音(ピツ、ピツ、ピー)

看護婦の走ってくる足音が近付  
いてくる音

CO

間

哲夫(M) あれから一年が過ぎた。おばさ

んの『いらっしやい』（の声）は前よりずっと小さくなった。食堂の戸が開くたびに、おじさんは手を休め、入ってきた人をちらりと見る。そうして、何事もなかったような顔をして仕事に戻る。だけど、時々、手は止まったままだ： さっちゃんがいなくなっても、時だけは確実に過ぎていった。食堂の前の街路樹が葉を落とし、雪が降り、今、また、花火大会が始まる。だけど、俺の時間はあの夜で止まってしまった。互いに見つめあいながら、まるで、じいちゃんの体の中に溶け込むように消えていったさっちゃん、指輪を握り締めながら息を引き取ったじいちゃん。あの夜の二人が、今でも俺の心を揺さぶる。

## 間

…俺を好きになつてくれる人はまだいない。

Σ